

8-5 カムイユカラ「チュポルンクル（サンタソワソ）」解説

語り手：平賀さだも
聞き手・解説：萱野茂

萱野：それは、言ってるのは何神様なのよ？

平賀：これ何だべな？ kamuy huci [火の神様] だべ。

萱野：あー、そうかい。kamuyyukar [神謡] santasowaso、この santasowaso ちゅうのは sakehe [繰り返し] だな。これね。

平賀：sakehe よ。繰り返しの。

萱野：うん、そうだね。

えー、わたくしは……、わたくしはでない。この kamuyyukar [神謡] の行き方として往々にして、その語る神様自身が、自称したり、あるいはこう、よそからそれを見ていてそれを語っている場合もあるんだけれども、今の場合まあ語っておるのは火の神様、らしいということで、1人の少年が水を汲まされた。手桶を両手に持って、

「汲みに行きなさい！」

と言われても嫌がりながら、いわゆる、まああの、普通の俗語で言う

「からっぽやみ [怠け者]」の子どもなもんだから、もう嫌がりながら、まず手桶を持って言うのには、

「いいもんだなあ。お前は寝てばかりいる。」

と、その炉縁を叩いたり蹴ったりして怒りながら出て行った。そしてまだ入り口では、言うのには

「いいもんだなあ。お前は柱であるがゆえに立ってばかりいていいもんだなあ。」

と言って柱を叩きながら水汲みに出て行った。

そうしたら、しばらくたっても水汲みに行ったのが出てこない、いや、戻ってこない、どうしたんだろうと思って外へ出て辺りを見回しても全然戻ってくる様子がないと、そのままそれを捜しに、子どもを捜しに、ずっと小沢なり下って行ったら、そこを上って来たのはその、

ユグイ〔ウグイ〕の群が上って来た。

「ユグイよ、ユグイよ、うちの子ども、どこへ行ったか知らないかい？」

「知らないよ、私たちはアイヌのところへ行くと **parimomo**〔口をすぼめている〕 **parimomo** と、いわゆる、クチボソ、クチボソと、あの言われるので、アイヌの子どもが……、の行き先教えてやらん！」

と言ってすつと通り越ししまった。それから少し行くと **icanuy**〔マス〕いる。この **icanuy** ちゅうのは、

平賀：マス

萱野：マスだな。マスの群がやって来た。それに

「ちょっとすまないけど、うちの子どもの行き先知らないか？」

「知らないよ。アイヌのところ行ったら **mimici**〔身が煮えている〕 **mimici** と言って」、と言うのはお前の肉が柔らかくてすぐに溶けてしまうからその、肉……、まあ日本語に直すと、「肉が溶ける、肉が溶けるというふうなこと言われるから教えてやらん！ 教えてやらん！」

と言いながら通り越ししまった。それから少し行くとこの **sipe**〔サケ〕ちゅうのは **siperup**〔サケの群〕だな、やっぱり、

平賀：**siperup**。うん

萱野：アキアジ〔サケ〕の群

平賀：そうだ、そうだ。

萱野：アキアジ〔サケ〕の群がやって来た。

「アキアジの群、ちょっとちょっと、うちの子どもはどこ行ったか知らないかい？」

そうすると

「いや、私たちアイヌのところへ来ると **kamuycep**〔サケ（神の魚）〕 **kamuycep** と言って、えー、神様の魚、神様の魚と大切にされるから教えてあげるよ。あの子どもはね、あまりにもその、水汲みに行かされるのに嫌がったので、えー、見せしめのためにお月さんへやられて、あれ、あすこで、お月さんに両手に手桶を持って立っているの見えるでしょう？」
とそのように、その……

平賀：世界中を見せてやるのにそういうふうにしてあるんだ。

萱野：うんうん、その世界中が見えるようにということであすこに……

平賀：子どもがた見えるように、うん、仕事が嫌ならばそうやって、いましおの……戒めに、

萱野：あーそうね。いわゆる、からっぽやむ〔怠ける〕子どもがおったら、「あれ、あすこで、からっぽやみ〔怠け者〕の子どもは、あのようにお月さんへ行かされるのだよ」
と、見せて聞かせるのに、ああいうふうにしたんだよと、アキアジ〔サケ〕が教えてくれたので、ようやく、その所在を見ることが出来ました。だから、これからおる子どもは決してその、いわゆる、からっぽやんだり〔怠けたり〕してはいけないよ。必ずその水を汲めと言ったら、「はい」と言って汲む、というふうにこれはやっぱり生活の中でよく働く子どもはいいんだ、というその、教えをも含められておるもののようにです。これは **kamuyyukar**〔神謡〕、**santasowaso** と言うのはあの、いわゆる繰り返し

平賀：繰り返し節

萱野：ですね。どうも有難うございました。